土　岐　市　教　育　研　究　所
Ｔ　Ｅ　Ｌ　0572-54-1111　(内371)
Ｆ　Ａ　Ｘ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所　報　Ｎｏ．５５２
発行責任者　所　長　三宅　裕一
発　行　日　令和２年７月２０日
題　字　山田　恭正　教育長

『あおぞら入園式』

撮影者　泉小学校附属幼稚園　松田　喜代美　先生

「新しい生活様式」と「変わらないもの」

土岐市教育研究所長　　三宅　裕一

７月１日から、プラスチック製レジ袋有料化がスタートしました。このことは知ってはいたものの、７月に入って最初にコンビニを訪れた際、ついいつもの感覚で電子マネー（スマホ）以外は何ももたずに店内に入り、商品を持ってレジへ並んだときに、ようやくマイバックが必要だったことに気づきました。「レジ袋も購入します・・・」と店員に告げ、商品を詰めてもらいました。それ以来、コンビニを訪れる際、これも「新しい生活様式」の一つとして、マスクとマイバックは絶対に手にして車を降りるようにしています。

さて、学校も長い臨時休業を終え、子どもたちが戻ってきました。教育委員会も、園・学校訪問が始まりました。どの園・学校においても、３密が同時に重なることを回避した環境づくり、基本的な感染症対策の徹底、衛生管理体制の整備など、先生たちによる新型コロナウイルス感染症防止対策がとられ、本当に頭が下がる思いです。以前の訪問では見られなかった子どもの姿（風景）がいくつもありました。児童生徒玄関での体調チェックや検温（昔は服装チェック？）、全員がマスク着用（幼稚園児でも）、手洗い場やトイレの順番待ち足形フロア誘導シールの設置、正面ではなく少し斜めを向いてのペア活動、全員が正面を向いてしゃべらず食べる給食、自分の席に座り静かにしている生徒が多い休み時間、教職員による給食配膳、消毒作業をする職員など、「新しい学校の生活様式」がそこにはありました。

しかし、授業の中には以前と「変わらないもの」がいくつもありました。

①先生の明るい笑顔（眼差し・表情）

マスクやフェイスガードで隠れていても、先生の明るい表情（眼差し）は子供の心に影響を与え、やる気の源になっていました。

②話を真剣に聞く先生の姿

共感し頷きながら子供の話をじっくりと聞く先生の姿は、子どもたちの安心感と一生懸命話そうとする意欲につながっていました。

③支えてくれる仲間

失敗を笑わず、一緒に考え、成功を喜んでくれる仲間がいます。互いの成長を願い合う関係があります。

出口のなかなか見えないコロナ禍ですが、学校職員と子どもたちの努力で、園・学校が再開できていることに本当に感謝します。

幼児教育の可能性と重要性

土岐市幼稚園・こども園長会長　梅村　利明

１　一人一人が考える一年に

４月７日（火）入園式・進級式が行われました。これまでは当たり前と考えられていた室内での入園式・進級式を、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から外で行うことになりました。幸いにして天候にも恵まれ、青空の下、桜の木々に囲まれながら、清々しい雰囲気の中で行うことができました。

前日の臨時園長会からの急な変更にも関わらず、大きな問題もなく式ができたのは、職員の対応はもちろん、保護者の方々の理解や協力があったからこそでした。

このことを一つのきっかけとして、これまで当たり前と思い込んでいたことを考え直す機会も増えています。

６月、幼稚園が再開し、友達との園生活が始まり、妻木幼稚園では、近くの施設に散歩に出かけました。

教師：今日は友達と手を繋がずに散歩に行きます。どうして手を繋がないのかなぁ？

子供：コロナウイルスがうつるから。

教師：いつもは手を繋ぐけどどうして？

子供：手を繋いでいると、危ない時に友達が引っ張って教えてくれるから。

教師：手を繋ぐのと繋がないのどっちがいいのかなぁ？

子供：う～ん・・・・どっちも。

教師：じゃぁ、今日の散歩は、心の手を繋いで散歩に行こうか！

私たち職員だけでなく、子供たちも今までとは違うことを考える機会が増えている気がします。「正解は何か」が明確になることは少ないと思いますが、私たちも子供たちも一生懸命頭を働かせる一年にしたいと思います。

２　質の高い就学前教育

１９６０年代にアメリカでペリー幼児教育計画と言われる実験が行われました。

【実験内容】

貧困の家庭に育つアフリカ系アメリカ人の子どもを実験群と対照群にランダムに振り分ける。

実験群：週５日午前中幼稚園に通う。
週２日午後家庭訪問し、園や家庭の様子、発達の促進について保護者と話し合った。

対照群：就学前教育なし。

【結果】

５歳時：就学準備
１４歳時：学校の出席日数・成績
１９歳時：高校の卒業率
２７歳時：収入・犯罪率・持ち家
４０歳時：収入・犯罪率・持ち家
５０歳時：健康面

上記について、実験群と対照群の間に統計的な有意差が認められた。

この実験は、実験群と対照群を５０年間に渡って追跡調査されました。その結果、学業不振等に陥る危険性が高い子供たちが「質の高い就学前教育」を受けることにより、「学業面」や「心の発達の面」だけでなく、最終的には「健康面」でも有意差があるという報告が数年前になされました。

幼児教育が子供たちの人生に大きな影響を与えるということを、改めて自覚しているところです。個人的な考えですが、単に幼稚園に通うだけでなく、保護者と継続的に週２回話し合いをもっていることが、この実験の「質の高さ」ではないかと捉えています。私たちも、より「質の高い幼児教育」を目指したいと思っています。

令和２年度　学力向上推進委員会　活動方針

組織

顧問校長　仙石　守一　校長（下石小）

学力向上企画委員会

学力向上推進リーダー：松原　敦也　教頭（下石小）
学力向上企画委員　　：山内　舞華（下石小）　塚本　真優（肥田小）
野田　大貴（土岐津中）　日置　貴大（肥田中）
教　育　研　究　所　：加藤　望　主任　西尾　新　指導主事

学力向上推進委員会

顧問校長　学力向上推進リーダー　研究所指導主事
学力向上企画委員
学力向上推進委員
福井　友美（土岐津小）　高津　宏尚（妻木小）　伊藤　康代（濃南小）
山田　鏡一（駄知小）　野々垣邦彦（泉　小）　臼井　康子（泉西小）
澤田　直樹（西陵中）　小野　晃央（濃南中）　虎山　泰昌（駄知中）
阿部　聖一（泉　中）

令和２年度　土岐市学力向上の取組

【小・中学校教育方針】

「やってみたい」を引き出し、
「できた」「わかった」と実感できる授業の実現

〈大切にしたい子どもの意識〉

ア「やってみたい」…授業の出口の見通しがもてる。課題の解決方法の見通しがもてる。
イ「〇〇だと思う」…課題に対して根拠をもって自分なりの考えがもてる。
ウ「なるほど！」…様々な視点・根拠から自分の答えを説明できる。
エ「できた！」「わかった！」…出口にたどり着いた理由と次時への意欲・見通しがもてる。

〈教師が特に意識すること〉

ア「何」を「どう」すればよいかが明確に分かる課題を設定する。
イ課題達成のための着眼点を示したり、学習形態を工夫したりして、自分の考えがしっかりともてる活動を位置付ける。
ウ体験、事実、概念・法則・意図の解釈、情報の分析、仮説の検証などを根拠に、自分の考えを広げ合ったり、深め合ったりする活動を位置付ける。
エ本時の学びを振り返り、「できたこと」「わかったこと」「さらに知りたいこと」「もっと学びたいこと」を表現させる活動を位置付ける。

今年度はコロナウィルス感染症対策の中での授業となりますが、「協働的な学び」を重点に取り組みます。子どもの考えを広げたり、深めたりすることを大切にします。どの活動でも出口を意識させ、根拠をもとに活動させ、学びを実感させる指導を積み重ねていきます。

令和2年度

土岐市スタンダード授業

土岐市教育研究所

4つの子どもの意識にさせていくためには教師の手立てと声かけが大切です！

「子どもの意識」「教師の声かけ」「教師の手立て」に分けて示しています。各授業過程における子どもの意識をもたせるための教師の声かけと手立てが示してあります。「学びの実感」を自覚させるために、「明確な出口の提示」「提示した出口に対する評価活動」「根拠を大切にする追究活動」がポイントとなります。どの学習過程においてもＩＣＴの活用について工夫できるとよいです。

※【教師の手立て】 ◆最も大切にしたい指導　◇意識したい指導

授業の導入 （10分以内）

【子どもの意識】 **「やってみたい！」**

〇なぜ～なのだろう。
〇今日は～ができればいいんだな。
〇～について考えていけばできそう（わかりそう）だ。

【教師の手立て】
◆「何」を「どう」すればよいかが明確に分かる課題を設定する。
◇前時までの学習との相違点・共通点・疑問点について考えさせる。
◇課題解決のための方法や考え方などの見通しをもたせる。

学習活動：主体的な学び （10分程度）

【子どもの意識】 **「〇〇だと思う！」**

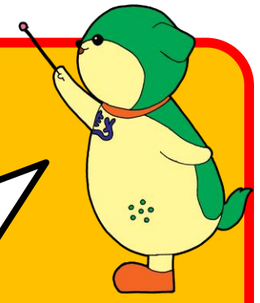
〇今日の課題の答えは～ではないかな。
〇きっと～すればよいのではないかな。
〇～だから、～ではないかな。

【教師の手立て】
◆課題達成のための着眼点を示したり、学習形態を工夫したりして、自分の考えがしっかりともてる活動を位置付ける。
◇これまでの学習との関連や相違点について着目させる。
◇つまずきが予想される生徒や核となる子どもに対し意図的な机間指導を行う。

《主体的･協働的な姿を生み出すために》

魅力ある教材
学び方指導
感性や想像力

学習活動：協働的な学び （15分程度）



【子どもの意識】 **「なるほど！」**

〇～だから、～と言えると思うよ。
〇～なら、～ということも言えるよ。
〇～という根拠は本当に正しいのかな。
〇～という理由から～とも言えるよ。

【教師の手立て】
◆体験、事実、概念・法則・意図の解釈、情報の分析、仮説の検証などを根拠に、自分の考えを広げ合ったり、深め合ったりする活動を位置付ける。
◇考えを広げたり、深めたりするために板書の仕方を工夫する（構造や配色）。

終末のまとめ （10分程度）

【子どもの意識】 **「できた！」「わかった！」**

〇～を意識（着目）すると～できた（わかった）よ。
〇次は～について考えてみたい（やってみたい）な。

【教師の手立て】
◆本時の学びを振り返り、「できたこと」「わかったこと」「さらに知りたいこと」「もっと学びたいこと」を表現させる活動を位置付ける。
◇本時の学びの状態を把握する（ノートや発言…授業後でもよい）。

※令和2年度は、「学習活動：協働的な学び」を重点に取り組みます

「心にひびく言葉」

苦労して乗り越えた壁は、今度は自分を守る壁になる

妻木小学校　教頭　下畑　茂

子ども達がいない学校。現実と向き合いながら、やりきれない時間を過ごしている。「収束したら…」「日常が取り戻せたら…」とその日に思いを巡らす。

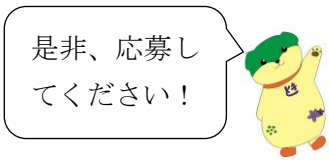
先が見えない日々を過ごす中、M校長先生が中学校の卒業式で語られた言葉が浮かんできた。「苦労して乗り越えた壁は、乗り越えた後は自分を守る壁となる」いかなる状況でも、小石を積み上げるように、汗して挑戦する歩みを厭わない人に。

ステイ・ホーム。息子の引っ越し荷物を片付ける。一冊の本に目が止まった。「夜と霧」ヴィクトール・E・フランクル。第二次大戦末期、収容所での体験記。見えない明日。将来への絶望と閉塞感の中で、何が人々の支えとなり、生き抜く力を与え続けていたのだろうか。著者は語っていた。「この世のどんな力も、あなたが体験してきたことを奪うことはできない。充実した過去の生活経験は、自分の心のよりどころとなり、宝物として築かれている。その輝きは過去から今を、そしてこれからを照らしてくれる灯となる。」と。さらに、「たいていの人が、今に見てろ、私の真価を発揮できる時は必ずくると信じていた…けれども現実には、人間の真価はこうした制約のある生活の中で発揮されていたのだ…」と。

ドキッ。７５年前の歴史が、私たちに教えてくれること。今の自分達を取り巻く環境。この経験さえも糧になると受け入れていく。生活様式の根本にある、考え方を転換し再構築していく時なのかもしれない。

掲　示　板

令和２年度　東濃地区教育推進協議会教育実践研究奨励賞
「実践記録、教材・教具の部」の募集について



《応募資格》

・東濃教育事務所管内の教職員【校長、教頭、教諭（講師、養護助教諭等を含む）、養護教諭、事務職員、栄養教諭・学校栄養職員】

《応募方法》

・前年度及び該当年度に作成又は使用したもので、未発表のものを応募する。

・応募申請　１０月２日（金）までに、学校単位で「出品一覧」を教育研究所にメールで提出する。

・提出締切　１０月１６日（金）までに、教育研究所に提出する。作品には、「作品応募票」を添付する。

《展示・審査》

・東教推研究発表会で展示する。〈場所〉瑞浪市立瑞浪小学校　〈期日〉１０月２０日（火）

・東濃地区教育推進協議会の審査委員会で入選を決定する。入賞者の実践記録、教材・教具については、説明や写真等をまとめ、市教委を通して紹介する。